

願

留岡 幸助

留岡幸助は、北海道家庭学校を設立した人です。

家庭学校というのは、家庭的な愛情の中で子どもたちを教育する場所です。



〔岡山県社会事業協会蔵〕
（「留岡幸助永眠十周年山室軍平永眠三年追憶記念集」より）

幸助は「家庭学校をつくりたい。」という自分の夢を実現させました。そこには「幸助の願い」があつたのです。話は、今から百五十年ほど前、備中国（現在の岡山県）の小さな城下町から始まります。

米屋を営む町人の子であつた幸助は、小学校からの帰り道、士族の子とけんかをしてしまいました。相手は木刀で殴りかかってきました。（その頃、士族の子だけは、木刀をもつことを許されていません。）初めは、木刀で殴られるのに耐えていた幸助でしたが、ついに相手の手にかみついてしまいました。翌日、かみつかれた少年の親が、幸助の父親に「町人のくせに、士族の子に手を出すとは何事か。もうお前の店からは米を買わない。」と告げました。父は「士族の子に歯向かうのは町人のすることではない。」と幸助を厳しく叱りました。

青年になつた幸助は、キリスト教に入信しました。大学でキリスト教を学んだ幸助は、卒業後、教会で仕事をすることになりました。

ある日、幸助に「北海道空知の監獄（刑務所）で、受刑者の心のケアをする仕事をしてほしい。」と依頼が来ました。親せきや友人は、「どうして悪人の面倒を見なければならぬのか。」と反対しましたが、一八九一年、幸助は北海道へと出発しました。

幸助は監獄で、受刑者の性格や、どうして罪を犯すことになつたのかを理解しようと努めました。そして、罪を犯す人を減らすには、少年の時期に愛情のある家庭で育つことが大切だと考えるようになりました。「人は刑罰によつて善良になるのではない。教育上、一番大切なのは家庭である。私は家庭学校をつくりたい。」

東京に戻つた幸助は、学校をつくるために必死になつてお金を集めました。そして一八九九年、東京の巣鴨に家庭学校を創立したのでした。

幸助は、巢鴨の家庭学校で、家庭的な愛情を注いで少年たちを育てました。そこから多くの少年たちが、社会へと巣立っていきました。

そのうちに、幸助の胸に、新たな夢が広がっていききました。それは、「北海道に家庭学校をつくりたい。」という夢でした。「厳しい大自然こそが人間を育ててくれる。」と幸助は考えたのでした。

幸助が家庭学校創立のために選んだ地、それは遠軽でした。こうして、一九一四年、北海道家庭学校がスタートしました。

少年たちは、親代わりの教師の愛情を受けて成長しました。大自然の中で畑仕事や家畜の世話など、懸命に働き、遊び、学びました。教師や仲間とともに喜びを分かち合いました。少年たちの目はどんどんやさしくなっていきました。



〔創立当時の北海道家庭学校〕

その姿を見て幸助は、自分の願いが叶いつつあることを感じていました。

北海道家庭学校は、いつしか地域の誇りとなりました。人々はその地を「留岡」と名付け、今もなお幸助の業績を讃えています。

一八六四	備中国（現在の岡山県）で町人の子として生まれる
一八八一	キリスト教の洗礼を受ける（七歳）
一八九一	北海道空知監獄に <small>*</small> 教誨師として赴任する（七歳）
一八九九	東京巢鴨に家庭学校を創立する（三十五歳）
一九一四	北海道遠軽町に家庭学校を創立する（五歳）
一九三四	東京で死去する（七十歳）

* 城下町：お城を中心に発達した町

* 士族：武士の家柄

* 教誨師：罪を犯した人に、教えをさとす人